

大阪津村別院制作の「御堂さん」の今年1月号に歌手の武田鉄也さんの『歎異抄』についての対談が載っていました。

武田さんは、お母様の葬儀の後、法事の事でご兄弟と行き違いがあり、悩まされていた時に、たまたまラジオで、『歎異抄』第5条の解説を聞くことができたそうです。それについて次のようにお話しされています。

「親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず」兄弟で法事のことでもめているときに、開祖の親鸞聖人が、「私は父ちゃんや母ちゃんのために、一返たりとも念仏したことはない」と言うて頂いていることとの有難さ」たまたま『歎異抄』のその部分だったのですね。「それまでもその存在は知っていたのです。ところが、親鸞と言う人が、現代人が、がんばりながらも上っているお葬式に関して非常に自由な考えをお持ちで、父母のために念仏なことと、私が死んだら加茂川に投げ捨てて下さいと言われていていること、兄弟で争っている時にこの二つは本当に救われました」と言うお話をされています。

さて、『歎異抄』には父母の供養のために念仏をしない理由として2点を挙げてあります。

(第1)に、すべての生きとし生けるものは生まれ変わり死に変わりする中でお互いに親子兄弟であったので、あらゆる生きとし生けるものが救いの対象であり、生まれ変わった次の生で仏になって助けるべきである。

(第2)には、自分の心を立派にして善ができるのであれば念仏によって父母を助けられようがそれは難しい。ただ、善ができると言う計らいを捨てて他力の教えに入り、お浄土に生まれやすく悟りを開いたならば、苦悩にある生きとし生けるものを様々な手立てをもって救う事が出来るとおっしゃってあります。普段のご法事について一考を迫られる大事なお言葉であります。

渡辺通の専立寺でした。

